

三字熟語⑥心技体

企業経営漫談士 岡野実空

三字熟語・西の横綱が「真善美」なら、東は「心技体」。それは武道などで重視する、「精神・技術・肉体」の3要素。その三文字は私たちのメンタリティーに合い、さまざまな技芸や運動の修得の解説に使われています。今回のコラムは、その経営への適用について考えます。

その1: 本義

「心技体」の語源は諸説ありますが、いずれにせよ、武術などにおいて「精神・技術・肉体」3つの要素のバランスが取れ、しかも融合している状態を意味していることに相違はありません。

しかしこの熟語をやたら振りかざす人間には、要注意！その多くは「心技体」の語順を「優先順位」に曲解し、「技術」や「体力」の不足を「気力」で補うという、どこかの国の昔日の軍人のような「精神論者」です。彼らはしぶとく生き残り、いまだに芸能やスポーツの世界などにはびこっています。

さて宅急便生みの親が遺した、経営人のバイブル『小倉昌男 経営学』。その総括にあたる「経営リーダー10の条件」の先頭は、「論理的思考」。それは企業経営において、上記のような行動を取ろうとするリーダーたちへの警告に他なりません。

その2: 優先順位

「心技体」で語源以上に議論的となるのは、その「語順」。因みに語源の有力候補、古木源之助による『柔術独習書』によれば、その順は、第一「身体の発育」、第二「勝負術の鍛錬」、第三「精神の修養」の「体技心」。しかし修得の「意」や「志」の強調によって「心技体」に落ち着き、語呂の良さで相まって、各界で使われることになったようです。

しかしゴルフの青木功氏など、その後のプロスポーツ界のレジェンドたちが語るのは、ほとんどが「体技心」。素人が楽しむための趣味とは一線を画し、それを職業とする以上、その優先順位に異論を差し挟む余地はありません。

さて学校出たての新人を受け入れ、組織で育てる美風を残す我が国で、まず新社会人に理解させなければならないのは、上記の「違い」と「過程」。彼ら彼女らが望むような、仕事を「楽しむ」状態に到達するには、基礎としての「知識」「技術」を修得する「時間」と「努力」が必須。またそれに必要な「心」は、目標に向かう「忍耐」です。

「三々な経営」

2-16~19 社員の育成①~④
E-4 「ライフ・シフト」の必要条件①あ・た・ま

続「三々な経営」

Z-13 「文化」のカ・その2(スポーツ)
Z-17 私の推薦図書②事業力

その3: 他要素

以上のような「心技体」の議論で怖いのは、その3つが「道」を究める要素のすべてと思ひ込むこと。それを防ぐためには、まず「心」という曖昧語の定義や範囲を明らかにする必要があります。一例を挙げれば、そこに「知性」や「理性」を含むか否か。もしそれが含まれないなら、直ちに四字熟語、「心頭技体」の議論に切り替えなければなりません。

また「技」も同様で、知識として習得可能な「技術」と、それに加え訓練が必要な「技能」をきちんと分け、検討されなければなりません。

故小倉昌男氏の偉大さは、以上を踏まえ、経営リーダーに必要な10の「心技」を、優先順位をつけて明示したこと。すなわち先の①論理的思考に続く、②時代の風を読む③戦略的思考④攻めの経営⑤行政に頼らぬ自立の精神⑥政治家に頼るな、自助努力あるのみ⑦マスコミとの良い関係⑧明るい性格⑨身銭を切ること⑩高い倫理観です。

またその死後に出版された『小倉昌男 祈りと経営』を読むとき、孔子のいう「これを知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」の、「心技体」最高レベルに到達できたはずの氏の無念に思いを馳せます。しかしその苦悩の中でこのバイブルを遺した、氏の偉業に私たちは深く感謝しなければなりません。なぜならその10項目は、「コロナ後」の経営リーダーの必要条件に他ならないからです。

2021年8月30日 実空